

Title	京都外科集談会第366回例会
Author(s)	
Citation	日本外科宝函 (1960), 29(5): 1375-1377
Issue Date	1960-09-01
URL	http://hdl.handle.net/2433/207136
Right	
Type	Others
Textversion	publisher

Naffziger, Love, Adkins, Gill 等が過去において認めたと同様の所見を認め、椎管腔内における我々の過去における手術所見とも符合する所見を得た。たゞ黄韧带肥厚症については関節嚢部内側部がその附着部である上関節突起の管内隆起度と相俟つて、根性接触

に参加し、靱帯の肥厚度は根性接触に間接的に作用しているという興味ある知見を得た。

(34) 椎間板ヘルニア

整形 桐 田 良 人

京 都 外 科 集 談 会 第 366 回 例 会

昭和 35 年 4 月 28 日

(1) 空腸癌の 1 例

飛 田 敏 雄・清 水 俊 丸

最近経験した空腸から発生したと思われる癌の症例を報告し、従来の文献より、その発生頻度を他の消化器癌と比較し、又年齢性別よりしらべ、その症状、組織学的所見に言及した。

(2) 腱鞘巨細胞腫の 1 例

外科Ⅱ 岩 橋 寛 治

腱鞘巨細胞腫は、外国にはかなり多数の報告があるが、本邦では比較的稀な疾患である。23才の男で右足第2中足趾関節節囊から発生したと考えられる本腫瘍の1例を経験したので報告し、あわせて文献的考察を行なった。

(3) 巨大なる上行大動脈瘤切除の 1 例

外科Ⅱ 山 崎 英 樹

68才婦人で昭和33年10月頃より前胸壁に無痛性搏動性腫瘍を生じ、約1年間で超手拳大に達した巨大な上行大動脈瘤に対し、2次的に基底部より切除、側壁縫合に成功したが、術後48時間目に死亡、剖検で切除縫合部に縫合不全、血栓、出血を認めず、多発性真性動脈瘤であつた事を確め得た貴重な症例を経験したので文献的考察を加えて報告した。

(4) 多発性筋炎の成因について

とくに筋炎ビタミンB₁欠乏説(小沢)
の酵素化学的検討

外科Ⅰ 藤 原 憲 和

急性化膿性筋炎の成因に関し、その多発性筋炎像を呈するゆえんをブドウ球菌の横紋筋に対する酵素的適応と理解する石上、貞先らの立場に立つて、ビタミンB₁欠乏状態が多発性筋炎の発症に重要な意義があると

する筋炎ビタミンB₁欠乏説(小沢)を検討した。

1) B₁欠乏白鼠にブドウ球菌を筋注射した際、対照にくらべてより少い菌量で筋膿瘍を形成する。

2) B₁欠乏白鼠横紋筋においては焦性ブドウ酸の著明な増量が見られ、かつその浸出液はブドウ球菌の発育を促進する。

3) 焦性ブドウ酸はブドウ球菌の発育を著明に促進する。

4) 焦性ブドウ酸によつて筋炎起炎菌、横紋筋適応菌は他の菌より強く発育促進を受ける。

5) 筋炎起炎菌、横紋筋適応菌は焦性ブドウ酸分解能、脱水素酵素能ともに他の菌より高値を示す。

6) 横紋筋、さらにその炎症巣は皮膚骨髓のそれらにくらべて焦性ブドウ酸含有量が高い。

7) 焦性ブドウ酸高濃度環境に発育した菌は焦性ブドウ酸分解能、脱水素酵素能が高く、かつその性質は遺伝的に固定されうる。

以上によつて筋炎B₁欠乏説の妥当性を実証することが出来た。

(5) 術前診断の困難であつた右横隔膜ヘルニアの 1 例

播磨病院 中山 剛・森 裕資

全身倦怠感のみを主訴とし、横隔膜ヘルニアの症候たる呼吸、循環、胃腸症状を全く欠如する1症例に接し、レ線像で右横隔膜膈角部に小児手拳大の半球状の囊泡様陰影を発見、気管支造影に際し、右下肺葉気管支、7, 10が太く短切され、空泡内鏡面下に造影剤が滴下せる如き像を認めた所から気管支と交通のある一部肺臓変化と診定するも病歴、症状からはレ線像に相当する診断は下し得ぬまま開胸術を施行。ここに始めて右真性食道裂口性横隔膜ヘルニアである事を知つた。肺葉との密な癒着を剝離し、内容たる胃底及び噴門を還納、ヘルニア門を閉塞するも術後5日目で再発を認

めた。

質問

杉 本 雄 三

手術後再発されたようですが、再発を防止する為にはヘルニア裂口を dicht に縫合すればよいのですか、それ共腹腔を開いてヘルニア囊に入り易い胃壁を腹壁に縫着すると云うような事をするのですか。

答

森 裕 資

- 1) 再発防止の特殊な手術法として特に記載が見当たらない。結局 Herniapforte を充分強固に閉塞する以外はない。我々の場合、縫合部が脆弱であつたため再発したと考える。
- 2) 術後再発はしたが患者に特に愁訴なきため経過観察中である開腹による整復は行なっていない。
- 3) 体壁腹膜と縫着するような方法は知らない。
- (6) 1才10ヵ月乳児胃穿孔の経験

大和高田市民病院 杉 本 雄 三

- (7) 原発性ブドウ球菌性腹膜炎の1例

大和高田市民病院外科

杉本雄三・倉橋道雄・丸山 泉

小児科 江 見 勇

生後35日の男子。発熱、腹部膨満及び嘔吐を主訴として来院、臍より膿汁の排出を見た。これを染色検鏡するとグラム陽性球菌を認めたので、肺炎双球菌性腹膜炎の疑いで開腹手術を行なつたが、何処にも穿孔は無く原発性腹膜炎である事が判明した。その際腹腔内より採取した膿汁培養により、起炎菌は黄色ブドウ球菌と判明した。ドレナージを行ない、菌の感受性検査の結果クロラムフェニコール、ストレプトマイシン、エリスロマイシンのみ感受性が証明されたので、トリブシン及びストレプトマイシンの腹腔内投与及びクロラムフェニコールの内服により全治せしめた。小児での原発性急性腹膜炎は通常肺炎双球菌、連鎖状球菌、稀には淋菌により起るものであり、ブドウ球菌によるものは非常に稀である。感染経路としては敗血症の一分症として来る場合、肺炎に続発する場合、及び胃腸炎より腸管を透過して起る場合等が考えられるが、本症例では前二者は考えられず、又糞便検査を行なっていないため、消化管経路の確証も得られなかつた。

質問

播磨病院外科 森 裕 資

- ① 菌の検索は直接塗抹法によるものか或は培養によつてか？
- ② 培養基は何を使用したか？
- (8) 厚生年金玉造整形外科病院に於ける整形外科機能訓練に就いて（其の2 患者の心理）

大 塚 哲 也

A) 疾患に対する心理（症例174例）

その29%に疾患に関する夢をみており、骨折では手術回数の増加に比例し夢回数も多くなる傾向あり、夢内容は、下肢に多い関係上、完全歩行のものが多く、腰痛、坐骨神経痛患者は疼痛に関する夢内容をもち、10才以下では全て手術に関する夢が多い。受傷或は発病時では恐怖、不安、あきらめ等が多く、ギプスに対しては不自由を訴えるものが多い。手術前では112例中43%が不安、41%が恐怖を訴え、手術中に疼痛が最も多く、終る時は安心感が78%をしめる。又手術時回想では二度と手術をやりたくないが45%を占めている。又訓練中の現在では全快期待が46%を占める。現在の疼痛では68%が感じており、その中、放散痛が45%ある。これは神経系疾患に多い。疼痛の種類は鈍痛が31%で最も多い。強さは同一の事が多い。持続は時々が多い。疼痛発現は運動時のものが多い。疼痛の減弱及び消失には物事に熱中する事により消失するものが最も多く、疼痛時処置にはマッサージが最も多い。現在の機能訓練ではつまらないと答えたものは1%にすぎず、患者は何れも気分的に良好な事を礼讃している。

B) 患者の趣味

100例を対象にした。楽器は単独使用より、協調調和によるものが好まれる。歌謡曲等の歌のあるものが好まれ、又合唱が好まれる。遊戯類では麻雀、趣味に読書、運動では野球、映画は恋愛ものが共に最も多い。以上の欲求に対しては本院の設備で充分満されている。問題となるのは疼痛の問題であろう。即ち身体的器質的变化により発生する疼痛に対しては、勿論これの原因を医学的に根本的に除く事が必要となり、それ以外の中枢性に残る所の因子に対しては、心理指導によりその因子を除去する事が可能となるのではなからうか。又室内の照度も気分的に関係するが、これを測定してみると充分な照度を有する事がわかつた。

C) 性格の心理

100例に各自の好みの色彩を選ばせた所、黒、緑

白の順となつた。79例を対象とし、小保内、松岡氏の色彩象徵法性格検査を行なつた。これによると躁うつ質15例、てんかん質11例、分裂質23例、神経質16例、ヒステリー質9例、何れにも属さない型5例、之等について更に正常、異常型性向、明暗型、積極、消極性等について追究、上述c)の趣味との関連性をしらべた。

以上、訓練に当つては発生する所の患者のあらゆる2次的欲求を解決し、絶えず自主性をもたせつつ、自分から進んで希望と熱意とをもつて訓練を楽しんでやるよう指導する事が大切であろう。

(9) 各種抗結核剤の関節内投与時に於ける局所変化の組織学的研究(第1報) SM17週投与グループに就いて

近 藤 茂 他

P. Erhlich の化学療法系数に関する概念を抗結核剤の骨関節結核における局所投与時について考察するため、各種の薬剤を健康モルモットの膝関節内へ注入して、その薬剤の種類、投与期間にわけて報告する。今回はストレプトマイシン17週投与群につき、肉眼所

見、レ線所見、及び組織学的所見について述べた。

(10) 膝蓋靱帯断裂に対する鋼線索引療法
の試み

整形 広 谷 速 人

症例は22才の男子。開放性損傷を伴う新鮮膝蓋靱帯断裂であつて、膝蓋骨に対して Kirschner 鋼線による直達牽引を行い、四頭股筋の短縮、廃用性萎縮を防いで後療法期間を短縮せしめ、断端は相接することによつて癒着性に修復せしめ、好成績を得たので報告した。

(11) 胸椎後部カリエスの1例

整形 藤 田 仁

19才の男子で背部痛を来し、脊椎敏過症の診断で治療をうけていた所、脊部左側に無痛性腫脹と両下肢の脱力感を来し来院せるもので、第7第8胸椎棘突起及び椎弓が完全に消失し、脊椎管内に乾酪性物質が充満し硬膜を圧迫し麻痺症状が発現していたものであり、後部カリエスに稀れとされる、脊柱変形、運動制限を認めた。